

鹿児島大学総合研究博物館のアウトリーチの取り組み

大木公彦

鹿児島大学総合研究博物館

Outreach activities of the Kagoshima University Museum

Kimihiko Ōki

The Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (oki@sci.kagoshima-u.ac.jp)

Key words: outreach, university museum, Kagoshima

地質・古生物学分野の研究活動が多くの人々に理解され、その魅力を知ってもらうことが、地質・古生物学の発展につながることに異論を唱える人はいないと思う。それを理解し魅力を知った若者の中から、この分野の研究者や教育者が生まれ育つことを望むが、そのためには地質・古生物学の研究成果を一般市民にわかりやすく情報発信する必要がある。

鹿児島大学総合研究博物館は、2001年4月に設置されて以来、社会への還元・社会貢献（アウトリーチ）を大学博物館の重要な柱の一つと位置づけ、可能な限り複数の分野にわたる企画を立案することを基本に、特別展、研究交流会、市民講座、公開講座、自然体験ツアー、特別講演会等の企画イベントを実施するとともに（図1～4）、常設展示室を開設した。また、2003年度から文部科学省「地域貢献特別支援事業」の生涯学習プロジェクトとして、「フィールドミュージアムの構築」をスタートさせている。本事業の目的は、自治体と連携し、住民の主体的な参加の

もとに、文化財や自然などの再評価、保存、維持を行ない、データベース化し、実践的、能動的な生涯学習の場を提供することにある。そのために鹿児島県全体をひとつの博物館「鹿児島フィールドミュージアム」と位置づけ、その中の展示物に相当する地形・地質、動植物、文化財、施設などをノード（結び目）として、それぞれのノードに地域の特性を活かした情報を集積すると同時に、ノードをネットワーク化することにより、現場で本物と接することのできる博物館として活動を展開することを試みた。その中で、地質・古生物学分野では、自治体と連携して地層や化石を文化財あるいは教材として現場に残す努力を行っている（図5、6）。さらに、研究論文で新たに命名された地層の模式地、重要な化石を含む露頭の保存とその活用にも力を注いできた。今後、南九州における地層の模式地のデータベース化と現地保存を進め、地質・古生物学のアウトリーチ活動に活用したいと考えている。



図1. 2002年度の公開講座「昆虫標本のできるまで—プロの目・プロの技」の様子。博物館兼務教員（理学部教員）の指導で、参加者が自ら大学構内で採集した昆虫の標本作りを行った。



図2. 2003年度の公開実習「三葉虫を調べよう」。特別展「海と生命の歴史—化石は語る」の一環として行われた講座で、大野照文氏（京都大学総合博物館教授）が三葉虫の生態や棲息環境について語り、参加者は本物の三葉虫の化石に触れながら、楽しい説明によって古生代の世界にタイムスリップして古生物学の魅力を堪能した。



図3. 2005 年度にボランティアが主催した「伊能忠敬大図展」見学会では、測地測量学の専門家である江頭庸夫氏（鹿児島大学非常勤講師）の指導を受けながら大図を見学し、測量技術についても学習した。



図4. 2002 年度の自然体験ツアー「なぎさの自然」。鹿児島湾内の桜島溶岩が露出する岩石海岸と湾奥部沿岸の重富干潟で行い、博物館兼務教員（理学部教員）2 名の指導を受けながら参加者は性格の異なる海岸の生物相について学習した。



図5. 鹿児島大学博物館が協力し、現地保存された指宿市の火山灰層の露頭。



図6. 鹿児島大学博物館が協力し、現地保存された鹿児島市南部の四万十累層群を不整合に覆う阿多火砕流の露頭。